

▼江澤誠著「大東亜
亜共栄圏」と幻のスマ
マトラ鉄道——玉
音放送の日に完成
した第二の泰緬鉄
道」9・21刊、A5判
四一四頁・本体五
〇〇円・彩流社



本書のタイトルから、評論家江澤誠氏が自らの著書に託した想いを汲み取ることは難しい。「幻の」とあれば、鉄道オタク向けの本だと誤解する人もいるだろう。しかし目次から本書の構成をみれば著者の想いは明らかである。本文と注で380ページ、二部構成からなる本書のうち、第一部「大東亜共栄圏」と鉄道」が70ページを占め、「第二部 スマトラ横断鉄道」が310ページ弱を占める。第二部では「第四章 スマトラ鉄道建設計画」と「第五章 スマトラ横断鉄道建設と企業・鉄道連隊」で合計50ページ、残りのうち240ページ以上は、建設のために使役され多くが命を落としたロームシヤ（地元民から徴発された労務者）や連合軍捕虜、オランダ民間人抑留者、さらには「慰

安婦」についての記述に充てられている。第四章を参考に説明すると、スマトラ横断鉄道とは、中央スマトラのムアロから北東東のパカンバルまで幹線だけで2200キロ、赤道をまたぎ熱帯のジャングルを拓いて建設し、ムアロ近郊で産する石灰と経路途中のロカスで産する石灰を、パカンバルまで運び、その後は船で川を下り、マラッカ海峡を渡ってシンガポールまで輸送するための基幹鉄路のことを指す。1943年1月に測量開始、44年1月に建設が始まった。燃料としてだけでなく、中央スマトラの石灰は良質でコークス製の重労働・長時間労働、そしてマラリア、アメーバ、赤痢などの疾病を考えれば、多大な犠牲を伴ったであろうことは間違いない。「まえがき」「あとがき」

本の戦争統行のために不可欠な鉄の現地生産が焦眉の急とされたのである。だが皮肉かつ悲劇的なことに、鉄道開通式の挙行は玉音放送が流れた1945年8月16日だった。じつはスマトラ横断鉄道は、オランダ植民地期にも計画された。しかし難しい工事となることが予想され計画が実施されることはなかった。そのような難工事の戦時下での取行はいかほどの犠牲を招いたかだが、最大の労働力調達源だったロームシヤだけに絞ると、工区沿いのジャングル内の飯場に寝泊まりし使役された人数は、本書の著者が複数の資料を突き合せ、泰緬鉄道などの記録も参考にして到達した推計ではおよそ25万人、そのうちの6割前後が命を落としたであろうという（181-182ページ）。この数字の妥当性は措くとして、

戦時下で食糧・物資・医薬品が不足しただけでなく、補給のためのロジスティックさえままならず、栄養状態が極度に悪い状態で行われた炎熱下の重労働・長時間労働、そしてマラリア、アメーバ、赤痢などの疾病を考えれば、多大な犠牲を伴ったであろうことは間違いない。「まえがき」「あとがき」

によれば、これまで環境問題や原発問題について複数の書世に問うた著者が、本書のテーマに向き合うに至ったのは、「スマトラ横断鉄道建設工事とロームシヤや捕虜の使役の実相に迫り、犠牲となつたロームシヤや捕虜の人数を可能な限りつまびらかにしたい」と思ったからである。その背景には、映画『戦場にかける橋』（1957年公開、翌年アカデミー賞作品賞受賞）で知られるようになった泰緬鉄道に比べて、スマトラ横断鉄道における使役実態はいまだ明らかでなく、この問題は「侵略者側の日本人として誰かがやらなければならない」という気持ち「が存在した。著者の執筆動機に言及するのは、本書が「自虐史観」を反映したものだとうためではない。もちろん著者の問題意識は明確である。だがこの問題意識に隸属することなく、本書の主題の考察にあたっては、スマトラ鉄道だけを注視するのではなく、この計画を、広くは日本・アジア・ヨーロッパを繋ごうとした「大東亜縦貫鉄道」構想のなかに位置づけ、とくに泰緬鉄道などを含むアジアでの鉄道建設遂行に共通する使役の傾向と関係づけて検討し（第1

部、資料収集に際しては、公刊・非公刊を問わず、多様にして国境・社会階層を越えた多声的な資料の渉猟を試みている。一般に注目度が低いスマトラ横断鉄道は、資料の収集が容易ではない。その中で可能な限り多様な資料を求め、オランダやオーストラリアについてはインターネットや電子メールを通じて資料や記録について問い合わせ、国内では鉄道建設関係者で存命の人や関係者の遺族を訪ねて聞き取りをし、さらにスマトラの鉄道建設地域を訪れて建設時を知る古老や元ロームシヤの子孫を探して聞き取りを行い（第七章、建設工事区間中の最難関所のクワンタン渓谷を船で下り工事の難しさを実感するなど、驚くべき行動力とエネルギーでもって情報の探索を行っている。戦後すでに70年以上が経過した今日、スマトラ鉄道に関する資料の収集と新たな資史料の発掘はますます困難となるだろう。その意味で著者が本書で提示している資料は、その解釈についてたとえ著者と意見を異にする人がいたとしても、資料そのものは高い評価に値する。「労作」とはこのような書のためである。（京都大学名誉教授）